

# 《2006年12月例会報告》

【日 時】2006年12月19日（火）19：00～21：00（→その後「ルン」～2：30）

【会 場】筑波大学附属高校体育館1Fミーティングルーム

【テーマ】サロン2002の10年間を振り返る①－10年間（10年以上）の環境の変化とサロンの変化

【発表・報告書作成】中塚義実（筑波大学附属高校／サロン2002理事長）

【参加者（会員）】牛木素吉郎（フリーランス） 宇都宮徹彦（写真家／ライター） 島原裕司（みずず書房） 高田敏志（町田高ヶ坂SCコーチ） 茅野英一（かながわクラブ） 徳田仁（㈱セリエ）  
中塚義実（筑波大学附属高校） 野田直広（富士電機） 宮崎雄司（サッカーマニア編集長）

【報告書作成者】中塚義実

注）参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

\*\*\*\*\*

## サロン2002の10年間を振り返る①

－10年間（10年以上）の環境の変化とサロンの変化－

中塚義実（筑波大学附属高校）

\*\*\*\*\*

### はじめに

1997年度より「サロン2002」の名称で活動するようになった我々のネットワークには、その前史も含めると10年以上の歴史がある。ちょうど10周年を迎えるにあたって、本年度後半の月例会では「サロンの歩んだ10年間」を取り上げることになっている。

その第一弾として今回は、サロンの前史から今日までを、サロンを取り巻く環境の変化もあわせて概観した。

### I. サロン2002の「紀元前」の物語

#### 1. 「日本サッカー協会科学研究委員会」と「サッカー研究会」について

サロンを語るには、多少なりとも私自身の個人史を語らなければならない。ここでは筑波大学大学院の修士論文のあたりから述べていきたい。

論文テーマは、「日本サッカーのプロ化に働く社会的背景の研究」であった。1986年5月に、(財)日本体育協会が「アマチュア規定」に替わって「スポーツ憲章」を施行、それにともない日本サッカー協会では「スペシャルライセンスプレーヤー制度」を導入するに至った（つまりプロ選手が公認された）経緯を、1965年の日本サッカーリーグ誕生から追ったものである。アマチュアリズム一辺倒であった日本のスポーツ界が大きく動き出したのがこの時期であった。

論文に取り組むにあたっての情報収集とネットワークづくりを意図して、1985年頃から、都内で行われていた「サッカー研究会」に、筑波から参加するようになっていた。これは、日本サッカー協会

科学研究委員会（戸荻晴彦委員長／当時は東京大学、現在は平成国際大学）のメンバー、すなわちサッカーに携わる大学の先生方によって組織された任意の研究会である。サッカーの研究に関する国内外の文献を読み、互いの研究を紹介しあいながら、研究者としての資質を高めあうことが目的のようであった。

都内の大学に就職していた友人の紹介もあって、大学院時代にはじめて参加したとき、「研究報告」をされていたのが大橋二郎氏（現日本フットボール学会会長）であった。「選手の移動距離と移動スピード」の研究である。タッチラインを底辺として、両コーナー付近から2台のカメラで一人の選手の動きを捉え、三角法を用いて分析するという発想が、非常に新鮮で驚いた（「数学はこういうところで使うんか！」）のを覚えている。

その後も、サッカーに関する研究分野の幅の広さを感じさせてくれる「サッカー研究会」であったが、そこで紹介される研究にはゲーム分析や体力に関するものが多く、社会学や歴史、心理学といった分野の報告はあまり為されていなかった。それでも、「東京」という、筑波とはまったく異なる空間で、「大人」の研究者と過ごすことのできるひとときは、院生の私にとっては非常によい刺激であった。

## 2. 「社・心グループ」について

科学研究委員会の事業として、毎年、夏季に行われる育成年代の全国大会出場チームを対象とする活動実態調査があった。この調査を担っていた人々は、「サッカー研究会」の中でも「調査班」と呼ばれていた。

「調査班」は、調査の準備や実施、集計のために年に数回、「サッカー研究会」の定例会とは別に集まっていたが、もともと社会学や心理学に関心を持つ人たちである。その分野の勉強会を、サッカー研究会とは別に行おうということになり、不定期ではあったが勉強会を行うことになった。お茶の水女子大学の杉山進研究室で開かれるようになったこの会は、「社・心グループ」と名付けられ、後に「サロン2002」につながることになる。

## 3. 「サッカー医・科学研究会」について

ところで科学研究委員会は、スポーツ医学委員会と共同で、1980年より毎年「サッカー医・科学研究会」を開いていた。全国のサッカー研究者の発表の場であり、研究の成果と指導現場との架け橋となるべく行われていた研究会である。

日本サッカー協会の事業として開催されていた「サッカー医・科学研究会」ではあったが、発足から10年経過した頃、「学会としての自立」と「サッカー協会としての事業展開」をめぐって、今後の方向性が議論されていた（この議論はその後も平行線をたどりながら長らく続いた。「学会としての自立」については、2003年の日本フットボール学会発足をもって一応の決着をみるが、「サッカー協会としての事業展開」については今日も研究と現場の間の溝が埋めきれないと感じる）。

ちょうど日本サッカーが「2002年 FIFA ワールドカップ日本招致」を正式に表明した頃である。「これは日本サッカー界が総力を挙げて取り組むべきことがらである、そのためにサッカー医・科学研究会でも、2002年を柱に据えたシンポジウムを開く必要があるのではないか」ということになり、提案者（「言いだしっぺ」）の私が、第11回サッカー医科学研究会（1991.2.11.）のシンポジウムの企画を担当した。

テーマ	「2002年ワールドカップと日本サッカーの将来」		
座長	戸荻晴彦（東京大学）		
演者	代表チーム、協会の立場から	…	横山謙三（日本代表チーム監督）
	プロ化責任者の立場から	…	川淵三郎（日本サッカーリーグ）
	指導者の立場から	…	上田亮三郎（大阪商業大学監督）

日本代表監督であった横山謙三氏には代表強化の観点から、プロサッカーリーグの準備室長であつ

た川淵三郎氏にはプロサッカー（まだ「J リーグ」という呼び名もなかった）の構想と 2002 年大会への見通しを語っていただいた。そしてもう一人、大学サッカー界の大御所であり、関西を中心に大きな人脈をお持ちの上田亮三郎氏にも粘り強く交渉し、お越しいただき、幅広い見地から日本サッカーの将来を語っていただくことができた。戸荻晴彦委員長の司会で進められたこのシンポジウムは、日本のサッカー界で「2002 年 FIFA ワールドカップ」を前面に掲げたものとしてはおそらく最初の部類にあたるのではないかと。サッカーが、選手や指導者、研究者だけでなく、多くの人の共有財産になるようとしていた時代の貴重なシンポジウムであった。

## II. 三菱養和会「スポーツいんろう」の物語（1992～1997）

サロンに直結するのは「社・心グループ」であるが、「サロン 2002」となる前に、今日のサロンの月例会の前身と言えるような会が存在していた。それが「スポーツいんろう」である。

### 1. 「スポーツいんろう」の誕生

横山謙三氏が代表監督だった 1988～1991 年、赤いユニフォームに身を包んだ日本代表は、「ウィングバック」を置いた 3-5-2 システムで戦う若いチームであった。しかし結果が伴わず、1991 年 7 月の日韓定期戦（於長崎）での 0-1 の敗戦を最後に、代表監督は交替となった。初の外国人監督、ハンス・オフト氏が就任し、1992 年 5 月 31 日にようやく最初の試合を行うことになるのだが、一方で横山氏は三菱に戻り、（財）三菱養和会に籍を置くこととなった。

「三菱養和」と言えば、東京では名の知れた総合スポーツクラブである。サッカー部門は U-15、U-18 とともに全国レベルの実力を持ち、かつては日本クラブユース連盟の事務局も置かれていた。

1975(昭和 50)年、三菱創業 100 周年記念事業のひとつとして設立された巣鴨スポーツセンターを拠点として、少年少女を対象とする「養和スポーツスクール」が開校しました。体育館、グラウンド、プールといった施設で実施する各スクールには、スポーツ各界から多くの著名な方々に指導者として参画いただき、その後「三菱養和スポーツスクール」と改称し、今に至っています。

三菱養和スポーツスクールが目指すのは、「和」を養い、スポーツを通じてスポーツマンシップを育てることです。現在では、幼児・少年少女および成人の各種スクールを開催し、通常の活動に加え、会員の交流を図るための親睦会、サマーキャンプ、合宿など、年間を通して各種イベントを実施しています。

また、少年少女対象のサッカー、スイム、総合体育、テニスといったジュニア向けスクールでは、優れた実力と将来性を併せ持つ会員を対象によりハイレベルな指導を行なう選手・育成コースを設けています。

（（財）三菱養和会ホームページ<http://www.yowakai.org/>より引用）

1992 年 2 月 28 日、三菱養和会にて、後に「スポーツいんろう」と命名される会の第 1 回が開催された。横山氏がかねてより抱いていた「問題意識」と研究会のアイデアを鈴木滋氏（成蹊大学）に話され、当時の科研の、特に「社・心グループ」のメンバーを中心に、少人数の研究会が始まった。初回参加者は、大串哲朗、大橋二郎、河合一武、鈴木滋、中塚義実、福井真司、横山謙三（敬称略）であった。

「問題意識」とは、「スポーツとは何か」ということである。

この会の趣旨と活動の経緯については、以下に引用した。

ちなみに「いんろう」というのは、水戸黄門の「印籠」と「in law」の掛詞であり、横山氏自ら命名したものである。

スポーツとは何だろうか。スポーツを通してみえる人間像、それらを取り巻く現実の社会の姿と問題点は何だろうか。そして将来は…？そんな疑問が、私たち三菱養和スポーツ文化研究会、通称「スポーツいんろう」が扱う究極のテーマです。

会のメンバーは職業や専門分野、スポーツ種目や経験等は異なるけれど同じ探究心を持つ10数名からなっており、「次代を担う青少年の育成と地域社会に根ざしたスポーツの振興」を事業の主な目的とする財団法人三菱養和会が、若きスポーツ指導者・教育者の育成をも目指し、“同じ土俵で自由に議論できる場”としてこの会を発足させてから早くも5年が経過しました。(中略)

私たち「スポーツいんろう」も、誰もがそうするように、sportsの語源に照らしてスポーツの歴史、民族、宗教、生活習慣、法や政治等との関係から「スポーツとは何か」を見つめてきた一時期もありました。(中略)私たちは、そのようなスポーツの文化的特性を理解した上で、「スポーツ指導者論」「スポーツ指導のリスクマネジメント」「スポーツとマスメディア」等のテーマへと議論を展開していきました(中略)。

例えば、スポーツ指導者に求められる資質、指導者自身の意識や資格認定制度などをテーマとする議論からスポーツ事故の判例研究へと進み、スポーツ法学の領域を覗いた時期がありました。その結果は、一昨年前に作成した『スポーツ指導のリスクマネジメント』という冊子の中に収めてあります。また、Jリーグブームが巻き起こった頃から、スポーツジャーナリズムやスポーツマーケティングと関連づけた社会的な領域へと興味、関心を広げていきました。

私たち「スポーツいんろう」では、このようにメンバー一人ひとりの専門分野を越えた領域をテーマとしています。冒頭に述べたように、「スポーツとは何か」という究極の問題意識と各人の興味、自由な発想と発言が許される場があったからこそ、継続的な活動が可能だったのではないかと思います。

(『スポーツいんろう報告書』、(財)三菱養和会、1997年8月 より引用)

## 2. 6年間、71回にわたる研究会

「スポーツいんろう」の研究会はほぼ毎月開催された。テーマと期日は別紙のとおりである。

まずは「スポーツとは何か」「アマチュアリズムとプロフェッショナルリズム」「チームとクラブ」といった基本的なところを整理し、「子どものスポーツ」「青少年のスポーツ」「地域社会とスポーツ」といった場面ごとのサッカー・スポーツ環境の話題に移り、「スポーツ指導者論」について時間をかけてディスカッションした。その後取り上げた「スポーツ指導のリスクマネジメント」については、最終的に、同名の冊子を発行する成果を残した。当時、三菱養和会に日本クラブユースサッカー連盟の事務局があったこともあり、この冊子は全国のクラブユース指導者に配布された。

Jリーグ発足以降は、サッカー・スポーツをめぐる環境が大きく変化し、「スポーツいんろう」のテーマも「スポーツとメディア」「ジャーナリズム」といった分野に及ぶことが多くなった。

1997年度はじめに『スポーツいんろう報告書』を発行した。この報告書には、60回にわたる勉強会の成果だけでなく、前年(1996年)に文京区・豊島区の高校運動部とクラブユース(三菱養和SC)が参加してはじまった「DUOリーグの実践」が紹介されている。このアイデアも、「スポーツいんろう」での議論がひとつのベースにあったと言えるだろう。

ついでながら、「DUOリーグの実践」は、第16回サッカー医科学研究会(1996年2月11日)のシンポジウム「関連委員会が考える、望ましい競技会と医・科学」における指定発言の中で示したアイデアを、その年の4月から具体化したものである。

その後は「ドーピング」をテーマとする勉強会が年度末まで続いたが、諸般の事情から1997年度末をもって「スポーツいんろう」の活動は終了となった。研究会は計71回まで続いていた。

## 3. 「スポーツいんろう」と「社・心グループ」

「スポーツいんろう」は会員制ではないが、研究会に参加された方(口コミで徐々に広がっていた)で希望者には、議事録と次回の案内が、三菱養和会から届くようになっていた。養和会のサポートと事務局を担ってくださった方の献身的な働きのおかげで「スポーツいんろう」が丸6年間にわたって成り立っていたのだと思う。

徐々に広がっていく「参加者」の中には、今日の「サロン 2002」に名を連ねる、研究畑以外の方も増えていた。そして、「スポーツいんろう」で出会った方を「社・心グループ」にお招きしたり、その逆のパターンもあり、今日の「サロン 2002」につながっていくのである。

参考までに、第 16 回と第 53 回の参加者（苗字のみ）を以下に記す。

第 16 回（1993 年 5 月 10 日）

大串、大橋、木幡、杉山、鈴木、仲澤、中塚、平川、福井、横山、中西、高見澤、皆川

第 53 回（1996 年 7 月 23 日）

伊藤、大橋、鈴木、中塚、永田、日野、高見澤、西子、皆川、淀川

### Ⅲ. 東京都高体連「サッカー科学研究会」の物語（1995～2005）

同じ頃、東京都高体連の中でも勉強会を始めようという動きが起こった。発起人は、喜熨斗勝史氏（現横浜 FC フィジカルコーチ）。当時、都内の高校のサッカー部顧問であった喜熨斗氏は、東京教員サッカークラブでの付き合いから、中塚とともに「サッカー研究会」に参加するようになっており、同様の研究会を高体連でもできないかと考えた。当時、筑波大学附属駒場高校教諭であった小沢治夫氏にも発起人団に入ってもらい、都高体連サッカー専門部の委員（全員高校のサッカー部顧問）に、研究会発足と会員募集を呼びかけたのが 1995 年度のことである。チームの強化と大会運営に多くの時間とエネルギーを注いでいる高校サッカー指導者に、ちょっと立ち止まって、スポーツ科学を学び、互いの実践を紹介しあう場を設けることで、指導現場に活かしていくことが目的であった。

こうして誕生した「東京都高体連サッカー科学研究会」は、年度初めの委員総会で「会員」を募集、会員には勉強会案内がはがきで届くという形で運営していた。長期休暇期間を除く年 9 回の勉強会は、高校現場に近い話題がテーマとなっていた。たとえば、「高校生の体力」「高校生の生活と意識」などのデータを持ち寄って議論するなどである。このような議論から、「負ければ終わりのノックアウト方式だけではだめだ。リーグ戦を導入しなければ」という方向に向かうのは必然であった。

後に「都高体連サッカー科学研究会」は、都内各地区に DUO リーグをモデルとしたリーグ戦をつくるための話し合いの母体となり、その時々を委員会を兼ねる形になっていった。それは、任意の「勉強会」だと参加者が少ないことや、いくつかの研究会や委員会をすべて別立てで行うだけの時間的余裕がなかったことが大きな理由である。しかし、高校生のサッカーライフに科学の目を入れたときに、必然的にたどり着いたのがリーグ戦であったということも、この研究会がリーグ戦を推し進める母体となった大きな要因であろう。

2005 年度末の時点で 99 回に及んだ勉強会は、現在休止中である。リーグ戦を議論する場が他に設けられたことと、高体連という組織の中で「研究部」が明確に位置づけられ、競技種目を越えた研究組織ができるようになったことがその理由である。また、様々な情報を簡単に得られるようになった今日、「勉強会」の意義が薄れたということもある。

### Ⅳ. サロン 2002 の物語（不思議なネットワーク「サロン 2002」のあゆみ）

「社・心グループ」の会合と言っていた集まりを「サロン 2002」と改め、定期的に行うようになったのは、「スポーツいんろう」が終わろうとしていた 1997 年度からである。「社・心グループ」の会合に、研究者だけでなく、さまざまな分野の方が参加するようになり、組織と内容の広がりが見られるようになってきたことが直接の理由であった。

その後の経過は、月例会 100 回記念とあわせて発行された「サロン 2002 のあゆみ」（サロン 2002 公開シンポジウム 2004『t o t oを活かそう』所収）でまとめた。ここでは目次のみ紹介する。

月例会100回記念「サロン2002のあゆみ」、『t o t oを活かそう!』、2005.3.31.

- I. サロン2002の前史（「社・心グループ」時代）
- II. サロン2002の誕生（1997年度）
- III. サロン2002の発展と組織化の芽生え（1998年度）
- IV. 月例会参加費の徴収（1998年度末～）
- V. サロン2002の組織化（1999年度）
- VI. 会員制の導入（2000年度）
- VII. 会員制「サロン2002」の5年間（2000～2004）

「サロン2002」となってから「月例会」はほぼ毎月行われ、この組織の中心的な活動となっている。1998年度末から月例会参加費を徴収するようになり、「月例会」という事業単体での独立採算の形をとるようにした。その後、「サロン2002」の行方に関するさまざまな議論の末、2001年度からは会員制の組織となり、今日に至る。組織としてはまだまだ未成熟であるが、潜在的なパワーを秘めた、全国的なネットワークとなっているというのが今日までの状況である。

## V. サロン 2002 公開シンポジウムの物語

会員制のサロン2002になってからも、月例会が大きな柱となっているが、年1回「公開シンポジウム」を開いて、より多くの方にサロンの成果を発信する場を設けている。これまでの経緯は末尾にあるとおりである。

本年度については、諸般の事情で11月開催が困難となり、12月24日に大阪で開催という案も断念し、期日が決まらないまま今日に至っている。「ドイツ（もしくはドイツ大会）から学んだこと」を中心にシンポジウムを企画することは総会での確認事項であり、その後の理事会メールでは「大会期間中、ドイツの育成環境を中心に視察されていた池田誠剛氏に演者を依頼する」ことを了承いただいている。さらに演者候補として、1975年よりドイツで暮らし、2006年大会では「ゲームアナリスト」として独自の手法で全試合を分析された庄司悟氏、および旅行代理業として今回も多くをサポートをドイツ観戦ツアーに導いた株式会社セリエの徳田仁氏に依頼し、さまざまな角度からドイツ大会を見ていこうという形で案を作成した。2月10日に関西で開催するというのが第一案である。

この企画案を元に、参加者で意見交換したい。

### <意見交換>

#### ■日程と会場について

- ・シンポジウムの日程は、サッカー、フットサルの大きなイベントと重ならないようにしないといけない。Jリーグ、フットサルの全日本選手権、日本代表戦は要注意。
- ・逆に、何かのイベントと抱き合わせると参加者も来やすい。3月24日に日韓戦が横浜である。試合開始時刻は決まっていないが、おそらくナイター。その日の昼に行くことができればよいのではないか。去年のクラマーさんのシンポジウムも、Jリーグ観戦後のスタジアムの中というのが結果的には良かった。
- ・トヨタカップの最後のときに、国立競技場の会議室でシンポジウムをやったことがある。試合日であってもスタジアム内でイベントを行うことは可能。
- ・去年のクラマーさんのイベントの評価は、ネット上ですこぶる高い。「サロン2002とはいったいどういう団体なのだ。あのサロンのイベントなら」という意識がある。うまくやれば集客は見込める。
- ・集客を目標にするなら「スター」がいないとだめ。中身のあるものをやるのであれば、40～50人でやるぐらいのイメージがよいのでは。50人以上100人ぐらいの会場で、60人集めるという目標でや

ってみてはどうか。

- 2001年度は80人以上集まった。この時は後援に、新潟のAlliance2002と横浜のソシオフリエスタが入ってくれた。特に、地元横浜のソシオフリエスタが、運営スタッフや参加者の動員を含めてよくやってくれたと感じている。
- 核になる団体を巻き込むことができるかどうかも重要。
- 関西で、本多さんのところでやっているSNSの「クロスポ」が盛り上がり、これが核になり得る。関西開催となれば、2001年のときのソシオフリエスタのような力になれるのではないか。
- 年が明けると、2月10日はもう1ヶ月前。時間的なことも考えると、2月10日に関西でシンポジウムというのは難しい。関西主導でできるなら別だが、準備期間が足りない。関西でやるのなら関西の方で候補を挙げてもらわないと。3月24日なら準備期間もあるし、集客も見込めるし良い。
- 2月10日は3連休。その初日に実施するのも問題がある。スポーツ関係者は3連休を使った合宿とかが入っているのではないか。

(結論) → 3月24日を第一候補にしたい。関西サロンはまた別に行う。関西でサロンの何らかの活動を大阪でやりたいという希望がある。

(後日) → 会場はOK

### ■演者・内容について

- 育成の話聞きに来た人が、育成以外の、たとえばマネジメントの話聞くことができる。育成に携わっている人に視野を広げてもらうというのがサロンっぽくていい。
- 池田さんがいて、庄司さんのゲーム分析をみたら、それだけで来た人はあっと驚くだろう。それに加えてマネジメントの話もあるとなると、遠くからでも指導者は来るのではないか。
- 庄司さんの話は斬新。誰も知らない。うまくいけば興味関心はわく。宣伝が重要。

(結論) → 池田さん、庄司さん、徳田さんに登壇していただく。

(後日) → 演者もOK

### ■その他

- 今年度の「出張サロン」はフランクフルトにしか出かけていない。年に何回かは「出張」とつけないで出かけていくのもいいのではないか。来年度以降カレンダーに入れていくことも大切
- 大阪の人にとって、大阪開催は「出張」ではない。
- 今日の月例会では「サロンが歩んできた10年間」を、サロン本体を中心に紹介したが、たとえば「フットサルの10年間」「メディアの変化の10年間」などもおもしろいだろう。
- 日本リーグができるまでの10年間のフットサルの発展は面白い。
- Jリーグができて14年。将来のJリーグ入りを目指した地方の動きが非常におもしろい。次回はこのあたりを取り上げたい。

## <参考：これまでのサロンのシンポジウムと報告書>

### ■2001年度■

<コンフェデレーションズカップ総括シンポジウム>

日 時：2001年7月22日（日）13：00～16：30

会 場：横浜市スポーツ医・科学センター大研修室

内容・演者：

運営側からみたコンフェデレーションズカップの成果と課題

長岡茂（JAWOC茨城支部）

ボランティアからみたコンフェデレーションズカップの成果と課題 竹原典子（横浜・茨城会場ボランティア）  
市民団体からみたコンフェデレーションズカップの成果と課題 小島裕範（Alliance2002代表）  
司会進行：中塚義実（サロン2002代表）  
主 催：サロン2002  
後 援：Alliance2002、NPO法人日本サポーターズ協会、ソシオ・フリエスタ  
運 営：サロン2002ワールドカップ・プロジェクトI  
参加者：85名  
事務局長：笹原勉

<報告書『2002年とその先へのメッセージ～コンフェデ杯は私たちに何を残したか～』>

内 容：1) シンポジウム報告編  
2) 特別寄稿編 … 小島裕範、浅野智嗣、数源一郎、片岡麻衣子、村坂有造、湯浅健二、  
宇都宮徹壺  
3) インタビュー編 … 鈴木徳昭さんにきく  
ページ数：102ページ  
発行部数：800部（2001年9月1日発行）

## ■ 2002年度 ■

<ワールドカップ総括シンポジウム（第1部）－「ささえる物語」を中心に>

日 時：2002年8月3日（土）13：30～17：00（13：00受付開始）

会 場：東京体育館第一研修室

内容・演者：

開催地からみたワールドカップ	長岡茂（JAWOC茨城支部）
キャンプ地からみたワールドカップ	宮城島清也（清水ナショナルトレーニングセンター）
ベニューコーディネーターからみたワールドカップ	村林裕（FC東京／宮城ベニューコーディネーター）
司会進行	中塚義実（サロン2002代表）

主 催：サロン2002

後 援：NPO法人日本サポーターズ協会

運 営：サロン2002ワールドカップ・プロジェクトII

参加者：54名

事務局長：加納樹里

<ワールドカップ総括シンポジウム（第2部）－「観戦と交流の物語」を中心に>

日 時：2002年8月10日（土）13：30～17：00（13：00受付開始）

会 場：神戸ファッション美術館4Fセミナー室

内容・演者

基調講演：ワールドカップ史からみた2002年大会	賀川浩（スポーツライター）
フットボールの母国からみた2002年大会	スー木下（英国大使館）
市民が伝えた2002年大会	橋本潤子（ライター／サポータープロジェクト2002）
メディアが伝えた2002年大会	宇都宮徹壺（株）スポーツナビゲーション／写真家
司会進行	中塚義実（サロン2002代表）

主 催：サロン2002

後 援：兵庫県サッカー協会、神戸ファッション美術館、NPO法人神戸アスリートタウンクラブ、英国大使館



運 営：サロン2002ワールドカップ・プロジェクトII

参加者：32名

事務局長：本多克己

<報告書『2002年F I F Aワールドカップを振り返って～2002年以降に何を残すか～』>

内 容：1) シンポジウム報告編 … 東京会場、神戸会場  
2) 特別寄稿編 … 江川純子、久保田淳、笹原勉、田中俊也、中塚義実、山田告人  
3) インタビュー編 … 鈴木徳昭さんにきく

ページ数：108ページ

発行部数：400部（2002年12月10日発行）

## ■ 2003年度 ■

<サロン2002公開シンポジウム2003：2002年を越えて～地域で育てるこれからのスポーツ環境>

日 時：2003年8月2日（土）13：30～17：00（13：00受付開始）

会 場：東京体育館第一研修室

内容・演者

リーグ戦で育てる地域クラブー東京都ユースリーグの試み	中塚義実（サロン2002代表）
欧州の取材を通して見た地域社会と育成	宇都宮徹尨（写真家・ジャーナリスト）
Jリーグアカデミーのねらいとその活動	山下則之（Jリーグアカデミー・リーダー）
司会進行	鈴木崇正（NECメディアプロダクツ）

主 催：サロン2002

運 営：サロン2002公開シンポジウム実行委員会

参加者：27名

事務局長：上間匠

<報告書『2002年を越えて～地域で育てるこれからのスポーツ環境～』>

内 容：1) シンポジウム報告編  
2) 特別寄稿編 … 原田和子、宮城島清也、本多克己、榊原孝彦、宮明透

ページ数：52ページ

発行部数：400部（2004年2月23日発行）

## ■ 2004年度 ■

<サロン2002「公開シンポジウム2004」 t o t o を活かそうー地域スポーツ振興のためにー>

日 時 2004（平成16）年11月27日（土） 13：30～17：00（受付13：00～）

会 場 立教大学5号館5224教室（JR山手線池袋駅西口下車徒歩10分）

シンポジスト：高橋正紀（NPO法人スティックルバックスポーツクラブ副理事長／岐阜経済大学助教授）  
徳田 仁（株式会社セリエ代表取締役）  
福西達男（NPO法人ポルベニルカシハラススポーツクラブ理事長）  
両角晶仁（日本スポーツ振興センタースポーツ振興事業部推進役）

コーディネーター：中塚義実（サロン2002理事長／筑波大学附属高校教諭）

主 催 サロン2002<<http://www.salon2002.net>>

参加申込 下記事務局まで、氏名・所属(差し支えなければ)・連絡先(TEL/FAX/Email)を明記の上、Emailにてお申し込みください。どなたでも参加できます。  
参加費 1000円。当日、会場で徴収させていただきます  
問い合わせ salon2002@infoseek.jp (事務局 担当：麻生征宏)

<報告書『t o t oを活かそう!』>

内 容：1) シンポジウム  
2) 特別寄稿 … 浅野智嗣 茅野英一 高橋義雄 麻生征宏  
3) サロン2002のあゆみ  
ページ数：126ページ  
発行部数：400部 (2005年3月31日発行)

## ■ 2005年度 ■

<サロン2002「公開シンポジウム2005」クラマーさん、ありがとう！>

－「4つの提言」に関する、「クラマーチルドレン」からの、40年目の報告>

主 催：サロン2002、ゲーテ・インスティトゥート (ドイツ文化センター)

日 時 2005 (平成17) 年11月12日 (土) 17:30~20:30 (受付17:00~)

会 場 味の素スタジアム内インタビュールーム

※同スタジアムで、14:00キックオフで行われる「東京V vs C大阪」の試合後に開催します

※16:30以降にスタジアム脇の「ロイヤルホスト」前に集合していただければご案内します

ゲスト : デットマーレ・クラマー

ホスト : 賀川 浩 (スポーツライター)

大橋二郎 (日本フットボール学会会長/大東文化大学)

両角晶仁 (t o t oプロデューサー)

中塚義実 (サロン2002理事長/筑波大学附属高等学校)

総合司会：加納樹里 (中央大学)

参加申込：下記事務局まで、氏名・所属(差し支えなければ)・連絡先(TEL/FAX/Email)を明記の上、Emailにてsalon@fcjapan.co.jpまでお申し込みください。どなたでも参加できます。

参加費 : 1000円。ただし学生は無料

事務局 : 本多克己、福岡哲朗、山田智子 salon@fcjapan.co.jp

<報告書『クラマーさんありがとう!』>

内 容：1) シンポジウム  
2) 寄稿 … 加藤貴志 本多克己  
3) 資料

ページ数：76ページ

発行部数：400部 (2006年3月1日発行)、500部 (2006年8月→関西クラブユース連盟 宮川理事長宛)